

# 日本主導の対話が導く新たな国際秩序



山内昌之

東京大学大学院総合文化研究科教授

国際関係史、イスラーム地域研究の第一人者である山内昌之さんは、歴史を縦軸、地域を横軸に幅広い視野から世界が地響きを立てて変動する瞬間を見極め、複雑な国際社会の構図を的確に読み解いてきた。その研究成果を生み出す源は、学者、教育者、そして一人の人間として、社会と国民の役に立ちたいという思いだ。

自ら、今最も世界情勢を揺るがすイスラーム社会との対話に努め、イスラーム地域の人々のために、時には苦言を呈することも辞さない。「平和的な協力関係にある日本だからこそ語りかけることができる」。日本の役割を静かに、だが力強く訴えると同時に、高い好感度に依拠した外交に満足せず、国際協調を図りながら国益を守る戦略的な中東外交を打ち立てよ、と警鐘を鳴らす。(続きは55ページ)

## 「市民社会を基盤とする ソフトパワー外交を」

東京大学大学院総合文化研究科教授

### 山内 昌之

Yamauchi Masayuki

1947年札幌生まれ。71年北海道大学文学部卒業後、カ  
イロ大学客員助教授、東京大学教養学部助教授、トルコ  
歴史協会研究員、ハーバード大学客員研究員などを経  
て、93年より現職。学術博士(東京大学)。国際関係史  
とイスラーム地域研究専攻。86年『スルタンガリエフの  
夢』(東京大学出版会)でサントリー学芸賞、90年『瀕死  
のリヴァイアサン』(TBSブリタニカ)で毎日出版文化賞、  
91年『ラディカル・ヒストリー』(中央公論社)で吉野作造  
賞、2002年『岩波イスラーム辞典』(共編著、岩波書店)  
で毎日出版文化賞などを受賞。その他著書多数。2001  
年第5回司馬遼太郎賞、06年紫綬褒章受賞。



photos by Suto Naotoshi

中東の概念は、オスマン帝国やソ  
連の解体など大きな歴史の変動とと  
もに変わってきました。特にソ連解  
体後はコーカサス、中央アジアもイ  
スラーム圏であることが認知され、  
また、石油、天然ガスなどエネルギ  
ーのパイプラインが文字通り結び付  
くことから、中東の地域概念が戦略  
的に拡大して認識されています。

日本にとって中東は、日米安保の  
関係から戦略的に認識してきた「ア  
ジア」とは異なります。しかし、特  
に9・11後、テロとの闘いや人道復  
興支援の一環としてアフガニスタン  
やイラクの戦後平和達成への援助を  
行ったことや、エネルギー安全保障  
の問題意識から、中東を戦略的に見  
ようとする機運も強くなってしま  
した。そして今、重要な二国間関係と  
しての日米同盟と日本独自の中東外  
交とをどう調和させるかという難題  
に直面しています。日本の中東に対  
する原油依存度は90%に及び、イ  
ランだけでも15%に達しています。  
したがって、アメリカとイランが衝突  
すると、エネルギー安全保障にか  
わる国益と、日米関係という日本の  
国家安全保障の根本の利益がぶつ  
かりかねない。さらに日本はODAに  
より人道復興支援や「人間の安全保  
障」の実現に努めています。

こうした3つの異なる、しかし相  
互に関連する総合安全保障外交を展  
開しなければならぬという、非常  
に難しい状況にあります。そもそも  
外交というのはあらゆる地域と付き  
合うことですから、アメリカが中東  
かといったあれこれの二者択一では  
ない。世界の中の日本・中東関係を  
どうするのか、特に緊迫感を深める  
ユーラシア南部から中東に広がる  
「大きな中東」に対して、国際協調  
を図りながら国益を守る戦略的な  
「中東シルクロード外交」を考えて  
いかなければなりません。

そこでは外交官による政府間外交

だけでなく、職業的専門性を持つ市  
民が、人と人、時には人が国家をも  
結び付ける、市民社会を基盤とした  
ソフトパワーの外交が重要になりま  
す。例えば、その柱としてJICAの  
技術研修や国際交流基金の文化交  
流をあげることもできるでしょう。具  
体的・物理的な技術、抽象的・精神  
的な文化を両輪とした“対話”こ  
そ、衝突を乗り越えて中東の安定や  
地球課題の解決をも導くカギになる  
のです。市民一人一人がその役割を  
自覚し、政府もそれを前向きにとら  
えて戦略化することこそ、日本独自  
の強い外交リソースになり得ます。

私はアラブとの対話において、日  
本の知恵や経験を伝えと同時に、  
そこから何を学び、どのようにして  
成功させるかはあなたの方の問題で  
あり、主体的な姿勢を持ってほしいと  
語ってきました。日本とアラブは異  
なる歴史を歩んできたが、特に西欧  
との関係に違いが見られます。日本  
は西欧のシステムをその時代におけ  
る最も優勢なシステムと受け止めて  
「とりあえず」は導入し、日本の伝  
統と独自性と調和させつつ適応させ  
てきた。しかしアラブの人々は、イ  
スラーム文明と歴史の過去の栄光と  
優位性を持ち出して文明論のレベル  
で対立し、異質な要素を受け入れる  
ことに素直でないところがかつてあ  
り、今でもあります。産業化に遅れ  
た後進国が発展するには、先に進ん  
だ同様の国がいかに発展したのかを  
知ることが大切です。アラブの人々  
は、何十年も社会や制度が変わらな  
いのはなぜなのか、変わるためには  
どうすべきなのか、自ら考え、忍耐  
力を持って前進的な道筋を探る努力  
をしなければいけません。そのこと  
を語りかけていく力が、幸いにして  
アラブ地域を侵略し植民地支配をし  
た歴史がなく、反対に人道支援や技  
術協力で人々のために貢献してきた  
日本にこそあると思います。